

演題11

母子を対象とした地域歯科保健活動について

○古澤潤一，大野秀夫

おおの小児矯正歯科・下関市

当医院では開院以来継続的に3つの地域歯科保健活動を行ってきた。ひとつは、幼稚園の健康教育の一環としての歯科保健教育、そして臨床医学的手法を用いた障害児施設の歯科的管理、さらにファミリーを対象とした母子歯科保健指導である。今回は、母子を対象とした地域歯科保健活動の5年間の動向について報告する。発表内容は、本活動のシステム紹介と今後の活動の方向性を検討するための5年間の参加ファミリーの動向およびファミリーへのインタビュー調査である。

【指導の流れ及び内容】

Step 1：集団指導

1. こどもの歯科保健についての啓蒙
2. 本活動のシステムの説明

Step 2：ファミリー単位の個別指導

- 1 回目 1. 指導用カルテ作製
2. TBI
3. 口腔内診査
4. 食事調査用紙配布
→ 郵送後、栄養分析
- 2 回目 1. コンサルテーション
2. 食事指導
3. TBI
- 3 回目以後 TBIの繰り返し

Step 3：定期健診（6カ月毎）

1. 口腔内診査
2. コンサルテーション
3. TBI

【結果】

1. Step 1 から Step 2 の参加率は64.5%、Step 2 から Step 3 の参加率は40.0%であった。
2. 参加ファミリーの歯科保健行動に向上がみられた。

演題12

九州大学小児歯科初診患者の実態の推移について

○永田めぐみ，早崎治明，山崎要一

田中克明，中田 稔

九大・歯・小児歯

近年の歯科医療は、齲蝕治療がほとんどの割合を占めていた時代を経て、しだいにその内容が多様化してきている。また、小児歯科専門の開業医数も増加の傾向にある。このような時代の流れの中で、地域社会において、大学病院小児歯科がどのような役割を担っているか、また、その役割が経年的にどのような様に推移してきているのかを検討するため、初診時の問診表とカルテをもとにして調査を行った。

調査対象は、九州大学歯学部附属病院小児歯科が開設された1979年4月から1993年3月までの過去14年間に、当科に来院し新患として登録を行った患者である。

調査項目は、性別、住所、初診時年齢、主訴、紹介の有無、歯科経験の有無、全身疾患の有無等であり、以下のような結果が得られた。

来院患者の初診時年齢は2歳から7歳にかけてが多く、特に2、3歳児の来院が最も多かった。

主訴で最も多かったのはやはり齲蝕であり、全体では来院患者の約6割であった。次に多かったのは歯ならびであり、全体では来院患者の約3割であった。経年的には、齲蝕を主訴として来院した患者数は開設当初に比べ減少し、ある程度の水準で推移していた。歯ならびは開設当初に比べ増加し、高い水準で推移していた。過剰歯・歯牙腫を主訴として来院した患者数は年度が上がるにつれて増加していた。

一般歯科等、他からの紹介により当科を受診した患者数は全体では約4割であり、年度が上がるにつれて増加していた。また、当科への紹介元で多かったものは、一般歯科、医学部附属病院、口腔外科であった。また、外傷、過剰歯・歯牙腫、埋伏歯、顎関節症を主訴として来院した患者は、他の主訴の場合に比べ、他からの紹介により来院した割合が高かった。

全身疾患を有する患者は全体の約3割であった。